

2006—2007 年女性能楽の展開

Developing Women's Noh —2006—2007—

宮西 ナオ子

MIYANISHI Naoko

Abstract: This is a report of Women's Noh activities since 2006 to 2007. Especially, in 2007, there have been a lot of developments of Women's Noh. The performance of women's Noh as a regular annual performance was first held in March at National Noh Theatre. Two women Noh actresses were permitted to enter *The Nihon Nohgaku-kai* or the Japan Noh Society, the most established Noh guild of Japan. And as a new challenge, the eldest acting female Noh performer of Japan, Madam Reiko ADACHI, 82, successfully premiered *Noh: King Lear* in Japanese written and directed by Kuniyoshi UEDA based on Shakespeare's *King Lear*. ADACHI took the role of *shite* as Cordelia.

Keywords: women's Noh, new Noh plays, Shakespearean Noh, annual female Noh performance of National Noh Theatre, *Noh: King Lear* premiere, Reiko ADACHI 女性能楽、新作能、シェイクスピア能、国立能楽堂女流能定期公演、『能：リア王』初演、足立禮子

はじめに

この研究は 2006—7 年の、女性能楽の新たな展開の報告である。特に 2007 年には大きな発展があった。2007 年 2 月 3 日に大阪にて行われた女性能楽師の会、「関西観世花の会」を皮切りに、3 月 24 日には、国立能楽堂で第 1 回の女性による定期公演が行われた。

国立能楽堂では、今後、定期公演シリーズとして女性能楽の演能が年に 1 回行われる。第 1 回の演能は、観世流シテ方能楽師鵜澤久師の『小鍛冶』と金春流シテ方能楽師の富山禮子師の『班女』であった。

2007 年秋には、日本能楽会の新会員に岡田すみ子師、森壽子師（両師とも観世流）が新会員として承認された。これで日本能楽会会員の女性能楽師は 24 名となった。

さらに、新作能の試みとして、10月27日に現役女性能楽師の最年長の足立禮子師が新作『能・リア王』を本邦初演した。これはシェイクスピア戯曲による英語能創始者の上田邦義師の翻案・演出によるもので、足立師は、装束をはじめとする新しい試みにも意欲的であった。

I) 国立能楽堂企画公演のスタート (2007年)

国立能楽堂では、重要無形文化財総合指定を受けた女性能楽師公演を中心にした公演を年1回、シリーズでスタートさせた。(国立能楽堂は、1997年から企画公演として年1回の女性の公演を始めたが、3年で中断していた)

第1回：平成19年3月24日(土曜日)

『班女』富山禮子(金春流)

『小鍛冶 黒頭』鶴澤久(観世流)

この公演に先駆け、国立能楽堂で配布されたチラシには以下のようなメッセージが記されていた。

「女性能楽師による能の公演開始

今年度より、新企画『女性能楽師による能』をスタートさせます。近年は女性能楽師の活躍も目覚ましく、また平成16年には女性能楽師も重要無形文化贈号指定認定に選ばれました。国立能楽堂でも、女性による能の発展を願い、その第一回を催します」¹

また本公演に関して各紙の新聞でも紹介された。新聞記事の見出しを紹介する。

◎読売新聞 2007年3月5日(夕刊)

「『女の能』流派超え考える」²

◎東京新聞 2007年3月17日夕刊

「活気づく女性能楽師、鶴澤(ママ)らでシリーズ第1回 24日国立能楽堂」³

◎朝日新聞 2007年3月20日(夕刊)

「女性能楽師に晴れ舞台 国立能楽堂で定例講演」⁴

これらの新聞では大きな扱いを受けていたが、全体的に本公演のコンセプトとしては以下の2点を考察するという意味合いがあった。

①地謡についての試み

もともと女性の謡いについては地謡が問題視されてきた。かつて堀上謙氏なども「女性だけの地謡部分のもつ能の(語り物)的要素を、ともすれば(歌)にしてしまう欠点が出てしまう」⁵と記してきたが、今回は地謡部分にも特色を出した。

金春流の『班女』の地謡は女性だけ。観世流の『小鍛冶』の地謡は男性だけにして、地謡の可能性を追求するという趣である。

「地謡を『班女』は女性だけ、『小鍛冶』は男性だけとし、声の高い女性よる地謡の可能性を探る」⁶というものである。このようにして女性の地謡の可能性を探っていくチャンスが到来したわけである。

②女性能楽を考える

鶴澤「能には男も女もない」

富山「女として能ができればよい」（読売新聞）

今回シテを勤める両師は新聞のインタビューで述べている。「鶴澤は『女の能が何なのか、公演をやる中で見えていけば』、富山は『流派を超え、女の能が成り立つようになればいい』とそれぞれ意欲を燃やしている」⁷というようなコメントが見られる。ここに同じ女性能楽師でもそれぞれの考え方の違いが見られるのではないだろうか。

それは拙著『能楽と女性』の「刊行にあたり」でも記したことである。

「女性の能楽に対する二つの大きな見解があることである。ひとつは、飽くまでも能楽そのものを探究すべきで男女など問題にすべきでないという信念。もうひとつは、能楽を愛し、稽古に精進しながらも、女性の能楽の可能性も探究すべきだという見解である」⁸というものである。今回の能公演では、そのような考え方の違いも、それぞれすりあわせていく好機になるのではないだろうか。

付け加えれば、鶴澤のコメントには、『能には男女の性別を超えた個としての表現がある。そのためには深い息の謡と芸が必要』が鶴澤（ママ）の信念。（中略）様式化された型を駆使する能は、生な表現がタブー。主人公が女性の能も、男性が思い描く美の象徴だ。『舞台から女性が見えるのでなく、にじみ出す表現に、女性能楽師の方向がある』と鶴澤は見る⁹ともいう。いずれにしても、このような場を通じて、女性の演能がさらに研鑽されていくことが期待される。

Ⅱ）重要無形文化財総合指定に2名の女性能楽師承認される（2007年）

2004年に22名の女性能楽師が日本能楽会の新会員に認定されて以後、2007年は2名の女性能楽師が日本能楽会新会員になり、総計24名となった。

今回認定されたのは観世流能楽師岡田すみ子師（昭和6年生まれ）、および森壽子師（昭和7年生まれ）。¹⁰

Ⅲ) 関西観世花の会の10年記念に家元が後見(2007年)

この承認に先駆け2007年2月3日(土曜日)大阪能楽会館では「記念公演関西観世花の会」が開かれた。関西観世花の会所属の女性能楽師は15名。公演の歩みは第1回が平成9年2月、今回は11回目となる。

今回は宗家観世清和師が秘曲『鷲』(シテ：森壽子)の後見を務め、加えて番組中の『松浦佐用姫』(復曲能；シテ：塩谷恵)は女性として初めてののぞむ能で、地謡も女性ばかりで演じた。

「関西観世花の会がお蔭さまにて十周年を迎えますに当り 観世御宗家様にご来臨たまわり記念の会を催させて頂く事に致しました。(中略)このたびの番組『松浦佐用姫』(復曲能)は、女性として初めて挑む曲で 地謡も女性ばかりで挑戦いたします¹¹⁾とあるが、女性として初めて挑む『松浦佐用姫』の地謡にも注目された。

Ⅳ) 東京「華の座」では、現役最年長の足立禮子師が新作『能リア王』に挑戦(2007年)

東京では、観世流、宝生流、金春流合同の「華の座」25周年記念が2007年10月27日に渋谷セルリアンタワー能楽堂で行われた。

観世流足立禮子師(82歳)は、『能・リア王』(上田邦義作・足立禮子・鈴木敬吾作補)のシテ(コーディーリア)を演じた。プログラム掲載の作者、上田邦義師によれば、リア王の三女コーディーリアは清纯で、「シェイクスピアの創造した最も美しいコーディーリアを、現役最長老の女流能楽師、足立禮子が演ずる。本邦初演¹²⁾とあるが、これを最長老の足立師は立派に神秘的に、しかも若々しく演じ通した。

この『能・リア王』の試みについて、能評家の堀上謙氏が長文の批評を発表している。その一部を引用する。

「今回の『能・リア王』は、上田氏がシテを演じた足立禮子のために書き下ろした作品で、主役をリア王から末娘のコーディーリア姫に移し、長女と次女に裏切られたリア王の苦悩と悲慘を描きながらも、コーディーリアの純粋で高貴な人間性と女性の神秘性をテーマにしている。(中略)能『蟬丸』は帝の子でありながら薄幸の姉弟を主人公にした悲劇だが、曲名になった『蟬丸』(弟宮)をツレにして、逆髪(姉宮)をシテにするという設定である。

『能・リア王』の構成もその例に倣ったといえよう。長大な原作の内容を、アイの道化師を上手に使って要領よくまとめたのは見事である。ともあれ、再演、再々演を重ねて、創作能としてのさらなる洗練を願うのは私ばかりではないはずである¹³⁾

なお、足立師自身のプログラム掲載の言葉に「いくつになっても新しい試みをしていく

ことは、能楽師の使命であり、喜びであると思います」¹⁴とある。

V) 女性親子二代にわたる能 (2006年)

2006年10月21日は、宝生能楽堂にて『第10回記念鶴澤久の会』が行われた。これは『卒都婆小町』のシテを鶴澤久師が、『船弁慶』のシテを娘の鶴澤光師が行った。

また鶴澤久師は2007年2月17日から20日まで、バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学など4大学で、『葵上』などを上演した。シテ方5人を含む女性能楽師を中心にした一行11人は、どこでも満員で、演能の後には、スタンディングオベーションを得たという。「世界無形遺産に登録されたためか、能楽が着実に海外で評価を高めている」¹⁵といい、海外での女性を中心にした演能の成功を述べている。また鶴澤氏は後輩の女性を育てることについても情熱を示しており、

「04年の女性総合指定者22人は、70代から50代。鶴沢(ママ)が最年少だった。『風穴は開いた。後輩の女性能楽師たちにつなげていく責任を感じる』」¹⁶といているが、娘、光師と共に二代に渡る女性能楽の可能性を築き上げている。

VI) 初のコンサート企画『音楽×音曲』(2007年)

2007年9月28日には、能楽と現代音楽の融合を図る総合芸術集団 company izuru による初のコンサート企画「音楽×音曲」が開催された。二人の能役者(青木涼子&坂真太郎)が出演した。

「二人の能役者、青木涼子と坂真太郎の声と、室内楽アンサンブルによる音楽のいまだかつてない形と可能性を伝える珠玉の作品俱卵を堪能できる唯一のコンサートです」¹⁷ということだ。ロンドン留学を果たした青木師の今後の活躍も大いに期待できる。

VII) 能舞の試み・他芸能分野との融合 (2006年—2007年)

女性には能舞が向いているといったのは、能評家の堂本正樹氏であるが、このところ能舞も見られる。ここに紹介するものは、シテが女性というわけではないが、これから女性の活躍が目立つ分野ではないかと考察し、紹介する。

● 「面打ち×能舞シリーズ」(2006年)

3月11日、4月2日、5月5日、6月3日、7月2日、8月25日、10月9日、12月11日にわたり、22歳の能面打ち新井達矢を描いたドキュメンタリー映画『面打』と上映後の

能舞。(能楽師中所宣夫と大鼓、ギター、チェロ奏者、三味線奏者などのコラボレーション)

能楽師にプラスして音楽の様々なジャンルにわたるアーティスト達とのコラボレーションが行われた。

●平成18年12月2日

「語り・舞・能舞—馬場あき子による『橋姫』の世界—」

地唄舞・義太夫とのコラボレーション

セルリアンタワー能楽堂5周年記念公演

『橋姫』のシテは津村禮次郎師

本公演のシテは女性ではないが、能舞を扱っているものとして掲載している。馬場あき子は、「初演以来、津村禮次郎さんの能舞はなくてはならぬもので、能の型をはみだす事なく笛や地謡と調和し、繊細な感情表現をみせ、激しい大鼓と拮抗するなど楽しみな見所が多いものです」¹⁸といている。

●平成19年10月20日

「舞踊と能 恋の哀れ」

日本舞踊とのコラボレーション

能舞囃子：シテ津村禮次郎

本公演もシテは津村禮次郎であるが、津村紀三子師の『文がら』を扱った公演として、紹介する。

『文がら小町』は、十五年前の津村禮次郎師との出会いから始まります。津村氏の恩師津村紀三子（女流能楽師）の女性らしい創作能『文がら』の作品に深い感銘を受けました。念願叶い、原作の心を大切にしながら改綴させていただきました。今年は津村紀三子氏の三十三回忌だそうです。これも何かのご縁でしょうか。能と舞踊の表現の違いに苦しみながら、そのコラボレーションを私なりに探り、文がらを抱いた小町の深草少将への懺悔の心と老いの孤独を表現できればと願いつつ舞わせていただきます（孝の改会主 藤間勘七孝）¹⁹

まとめ

この2年間の女性能楽師の展開と考察

①女性能楽の定義について

女性能楽については、何を指して「女性能楽」といわれるのかと定義が明確ではなかったが、今後、様々な活動を通じて、明確になっていくはずである。

②古典能における承認

国立能楽堂企画公演のスタートおよび重要無形文化財総合指定に2名追加。また関西花の会では『鷲』の後見を家元が勤めるなど、古典能の世界でも、女性能楽師の実力は認められている。

③次世代への継承

鶴澤久・光親子が女性2代にわたって古典能を勤めるなど、新しい世代への継承が期待される。

④新しい試みの挑戦

新作能「能・リア王」に挑戦するなど、新しい試みにもチャレンジしているのが、最年長の足立禮子。常に花を追い求める姿勢は、世阿弥の『花伝書』に則っているといえよう。

⑤融合芸術（コラボレーション）の進化

日本舞踊、映画、義太夫などとさまざまな分野との融合により、能楽にも新風を注いでいる。これは女性能楽師のみならず、若手の男性能楽師にも見られる試みである。

④男性能楽師からの評価

故観世栄夫（2007年6月没）の最後の本『華より幽へ』では以下のような記述が見られ女性の実力を認めている発言が感じられる。

「女人禁制の感があった能楽だったが、女性能楽師津村紀三子さんが登場して能楽団の能楽協会に女性の入会が許された。日本能楽会は、2004（平成16）年、無形文化財総合指定に22人の入会を認めた。今や彼女らが国立能楽堂で舞うのだから、常に時代を意識しなければならないと思う」²⁰と述べている。

1 国立能楽堂「3月企画公演」パンフレット

2 『読売新聞』（夕刊）2007年3月5日

3 『東京新聞』（夕刊）2007年3月17日

4 『朝日新聞』（夕刊）2007年3月20日

-
- 5 堀上謙「女流能の行方—『華の座』公演によせて」『能楽展望 p.163
 - 6 『読売新聞』（夕刊）2007年3月5日
 - 7 同上
 - 8 宮西ナオ子『能楽と女性：一考察—能楽における女性の役割』檜書店 2006年 p.4
 - 9 『朝日新聞』（夕刊）2007年3月20日
 - 10 『観世』檜書店 2007年9月号観世グラフ
 - 11 関西観世花の会一同『記念公園関西観世花の会』パンフレット
 - 12 華の座『能・リア王』パンフレット 2007年10月
 - 13 堀上謙『『能・リア王』の試み』『赤旗新聞』2007年11月23日
 - 14 華の座『能・リア王』パンフレット 2007年10月
 - 15 『東京新聞』3月17日（夕刊）
 - 16 『朝日新聞』（夕刊）2007年3月20日
 - 17 www.izuru-japan.net/ 2007年8月18日取得
 - 18 セルリアンタワー能楽堂五周年記念公演「語り・舞・能舞—馬場あき子による「橋姫」の世界—パンフレット
 - 19 藤間勘七孝 孝の改V『舞踊と能 恋の哀れ』パンフレット
 - 20 観世栄夫『華より幽へ』白水社、p.38

参考文献

■書籍

観世栄夫『華より幽へ』白水社、2007年

宮西ナオ子『能楽と女性：一考察—能楽における女性の役割』檜書店 2006年

■新聞

『赤旗新聞』2007年11月23日

『朝日新聞』（夕刊）2007年3月20日

『東京新聞』（夕刊）2007年3月17日

『読売新聞』（夕刊）2007年3月5日

■雑誌

『観世』檜書店 2007年9月号観世グラフ

■パンフレット

鶴澤久の会「第十回記念鶴澤久の会」2006年10月21日

関西観世花の会一同『記念公園関西観世花の会』2007年2月3日

国立能楽堂「3月企画公演」パンフレット 2007年3月24日

セルリアンタワー能楽堂五周年記念公演「語り・舞・能舞—馬場あき子による「橋姫」の世界 2006年12月2日

華の座『能・リア王』パンフレット 2007年10月27日

藤間勘七孝 『孝の改V舞踊と能 恋の哀れ』パンフレット 2007年10月20日

UPLINKFACTORY『面打ち』2006年12月11日